拾葉集

五六

扶桑拾葉集卷第五

目録

和泉式部物語

和泉式部

天理大学

拾遺拾葉集巻第五

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

和泉式部物語

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かたらいて
ふるひ
あそ
あそ
ら
かく
身の
ひ
ひ
ひ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あまはそこにすみあらそひて

かくれもなきはつれなくもあはれなる

見もむしのえさしたるかな

と思ひのまことなるさまにあるかやうなる

ほのかにとはしたるこゑ

をりふしの風つよくふきたるのち

郭公のうくひすにまがへて

いつくにかあらんとおぼえ

ものすさまじきあんばい

うらはなにはまことにあまのすまひ

四月十五日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
いうなり。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

事にそうらふべし人々あまた侍らふ中に
列るき事をいふまゝにまゐてきたれるを
めづらしこの方をのらうなどもなふ
なりぬ扨京もこましたくみくわるれたる
侍らしとよりあるとなりあるもみくハ
よき事やいわるうまれ出わりこまの侍ともを
わるうん人々をそ大阪よりまゐ世事ハ
ふあるをもしらうあるとの
のゆわりをそるしあるをもあるを世のわり
さ海内笑ふまつるまくハうれ侍わるを
わるうまるこれをゆるしまゐんあと同のをいつらう

いうむ侍をくうれそはうなきすこし事なむ
とあるまこれをあまをもうしうしく人のいあるを
よをわるをもとそうりの侍ふをもうふ屋
をもうきゆりしうあるをいとはれし
しるわるよこあ兵をしくやとれうま
しをのわりをそもまして関わるき事を
ちんなとゆわりうるかとのわつるる
くあるうをしてれそうあるをしう
んうりかをおかつうれくなるれどうるあお
ゆしをはあやまあるとうんそあるかくをくく
ふをとひるしをそうあるを人をあまをかやうを

こゝあたいとゝのしゝなん、ゆかうとも、はなまし
きうちよ、伊とゝ、わとゝ人、ゆるとまゝゆうとはゆうと
あるしゝあまひくいさ行人、ちとしうとゝ人を
うゝ所わゝ人のとうよゆをきこゝみんとく
車とさしよせうひくくゝ車のゆうのを行ハ
まとうをあしをのまくゝも人もこれをはとそのくい
あふ伊ゝ積ゆをりうゝれをもれ人も所
やをゝ人ゆうき所しのわうをうゝをお
ゝまをうひゆ月をいとわうゝれたゝ所を
しのゆくのゆくをゝまゝあゝきゆゝなれを
かゝまゝきゆ人もゝゆをゝとゝもあゝゆ

をゝをゝむ人なゝをゝあゝおゝゆをゝゆをゝつを
行ゝゆゝゝゝなゝむゝゝと物語わゝゝゝ所物
ゆまをゝくゝゝのをゝをくゝ山とゝゝる
をゝゆゝ人ゝゆゝゝゝ

[illegible]

朔はるたちかへりぬれば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝ行くせつるとゝろをそ
と思ひ出まつるを島へとゝろたゝ思ひ
やるに二三りの月いとゝあはれ
たゝよ出おくるゝよいまゝや月をあく
まつゆくとく

新後拾遺十五
我ものゝおもひいたりや夜まれ大まと
月ゝりをそイ
きいのゝりもゝふ松ゝきうもゝ文ゝ
月のあゝ雪ゝよ雲ゝ雪ゝ
つひゝ秋ゝ
一程ゝ月ゝ

こゝ行ゝ程ゝ
と国ゝ
おゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
車行ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

人のいまはとなりてこちらをば
向きて　あうさかやとくとゝ
まゐりて出のまゝ
　　ちりにたる雪井の月はかはりて
　　うきもうい世をんなかい捨
世　世ん一ゆ月ゆ捨
　　ゆきもうき捨をあつまく
　　函山の月紙なりとつを捨
　　海ゝゝて　ゝん一あさ
　　ゝ捨あるをとゝ　ゝまゝ
　　ゝいとなりゝゝ　ゝあ

よ紀こう先ゝなゝ紙ゝゝゝ思ゝ文も
いゝゝ先おゝゝを つきゝの明ゝゝみゝゝゝお
かゝゝ　行ゝゝある人ゝこの世行ゝこの世
源井將ゝいゝゝ行ゝ　ゝ行ゝをゝし行
ゝりといゝゝある人ゝゝゝ　注イ　ゝ世ゝ
ゝなゝゝゝゝゝゝきこゝ行ゝゝいとゝゝゝゝ
ゆかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面白くもなく、[illegible]ものとも、[illegible]
[illegible]
[illegible]

思ひ出やもとめ[illegible]
あまのゝ[illegible]
とあれば、さて[illegible]
さ[illegible]

なつかしみ[illegible]
いまはしの[illegible]
とあれば、[illegible]

[illegible]
いとゞ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

かくて二ヶ月あまり、夕まれば秋の風
うちそよぐ。あたりの山車を引きいまはり
さる者は、ひるまはまことにまいるものもいと多
しうゆゆしくもむしろるなる事なれど
の程もなく帰りをのめをけちりぬる
成ぬるまいとおかつ夕美まく、をとこ志
しるなるべんか、
沙弥のりちのとの有まるる
ゆゆしきまでおぼしたる
むかしの人いと関しきりまたこの和とる
ゆゆつつれく成ぬ事とされと、

人を伊さ内まいはれにりをしまれと
秋のゆふまれ有事ならと
との程なる所しるもあるれるの山人も
あるをかゆまるの人こころ世中を
かくさまくあるもちゆとへあまま
しうのりるあるを成ぬまいつまく
なくまんまいし山てまこ七日
そうまわんとおのひまくまこ文ひき
しも成ぬるとゆはそれ山文つつを
ホわそ一日まりてけりひとを石山よ
なりゆ此ゆそ和とまするとゆされい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ゐうみちさとをとこ都へ
ゐなりの折ゐの清をこう
とすまゐは見してられしうもまま
いゐをこゑをとりをとこ人をとりあまをあき
ましれはいこゑをこ
年の秋ちふさの山のひとゑく
ゆかゐをこをとりひまをしゐ
ゐこゑゐ
こゑをとりゐをとゐをあをとを思ゐをこを
をはのうふうを出ゐく見を
こゑをひこをとをこゑをこゑをの法を

をまをいゐをいく
関山のをゑをとゑをまをなみをこを
ゐのうこゐのうこゐをこゑを
ををををに
山をとをのう山をちを法こを
いをこゐこををこをひみを
をはをををひをうをまをいをまをれをを
ゆかををゐこいこをこゐをを出をりをを
ををひ見ををあをゐをいをき出法を
けををなをしをを
あをゐゐゐの山をちをへ

[illegible]

山をたてくるまに紅葉を[illegible]

今一しほの[illegible]

[illegible]

[illegible]

を物ゝえそうなる絵をかゝせ給ふ。おなじ[illegible]なる
むしとおぼしき人〻とりはやしてをるに
をかしとまれるもこゝろゆきをからしてはき
るも実にこゝろゆかるゝをりはかゝる
こゝろ帰京をわすれんいきをれしとおぼ
しめすにはかなくこそ物をおもひ
まゝ涙をながすこゝろをなぐさめ同じ心
うしていまは人をなすりまねをそみきを
をこゝろしく歌のわとをゆるまゝにさる
さゝしのよの物ゆとしたちやと嘆ちて出
きるものゝ世ゝやうゝゆきていとうとをそ

涙つゝをくるゝ袖ゆまこゝろ此暁ゆきのかゝをしんな
ゆかゆゆ事をとをたるきあるかをゆきを
ゆをるこゝをいのゆゆあるこゝ

秋の初をの月をへまゝり
やをゝ花をひゝゆりゆりうる
いこゝゆゆをいをゝをゝをゝをゝきあるゆゆ月を
ゆをんとゆをゆをゝをゝなをゆ秋ゆをゝ
ゆをゝをゝをゝゆ海をゝをゝをゝ
をゝをゝをゝ行をゝを思ゆをゝをゝをゝ
こゝをゝをゝ秋の中をゝ秋を物をゝ海辺
のやをゝ安むをゝをゝまゝをゝをゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

返事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

此ごろ[illegible]

物りさしい海をさぶ（き霜なる色ぶ

うちけぶ[illegible]

とうなまけ[illegible]

天ふこ[illegible]

いまと[illegible]

と[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とあまそそ

あまそそ

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

物と[illegible]

[illegible]

[illegible]

日[illegible]

の[illegible]

ひひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おもしろきことなり、かの面白いと
ばかりとおもふ歌なり、いとこゝろゆき
いさぎよくいとこゝろゆきたるかたちなり、
こゝろ強くかくのごとくなるものなれども、
いまだ年いとけなき人なれば、面白きことかな
と思ひしことなるべし、されども人間なれば
所のうるさきことも、はやくなりしと思ひ
あらはすなり、

春ふかみ花の盛りは過ぎぬれど
なほ面白き藤の花かな

かきつばたのあまたさかりなるを見て

花といふことばもあるなり、

春ふかみ花の盛りは過ぎぬれど
なほ面白き藤の花かな

かきつばたのあまたさかりなるを見て
花といふことばもあるなり、
春ふかみ花の盛りは過ぎぬれど
なほ面白き藤の花かな
かきつばたのあまたさかりなるを見て
花といふことばもあるなり、
おもしろきものなり、
そもそもかの花のもとにいとけなき
とものこゝろ、はかりがたしとおもひ
おきあまりたるなり、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一月ついたち高野山

[illegible]

神代よりありてきたる高なる御堂と

[illegible]

四辺し

神宮（ちぐう）いつきのそをみ（ちぐう）まつり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高もり海内こゝろを
あきらかとのこゝろをおきなくいふ
その教ゆるしまいの物をたれ人 四物
ひとつ せきやぶりて もしかこゝろあく
てまつりく後まつりはうりゑゆき法師
まとまるれとして尺くさくまいりおき
物をうたんやゆかすまれんまれとん
かたれ拾いまうまに又いまゆ所ぬる
ようわんまゆさやなる事のいてき
わくまわんとこゝろよいとあれそう
なうまゆこゝれらまゆ面はてやうよ上ふ

かたりなるいまうゆまうあれなる
ゆとゆと此世のこゝろをのれを只元
つまゆまうれゆまうひなるあうれ
うふゆまきこゝ絶ねゆ四こうる
また心のかたゝを四絶ゆ巻とゝお
とひうくゆかてをかいのこゝゆ四ぬ
ゆうりそうゆまいとうれうく物
を絶こてゆうくゆなるく第ゆと
法絶して
なれまゆのあゝまゆこゝよ巻ゆ
とのれをゆまわを

おいらなりそを西にかたみし
山寺の春のたそがれ
とのたえまに明わたるまで
のきのもりきれきまて
やまとたましいかしこ
ふるさとのやまひこまて聞ん
うらはるかに
こしのこと
と思ふのまに
正しうそ
さきよりつるのよりやしらせてや

うらはるかに
こしのこと
と思ふのまに
正しうそ
さきよりつるのよりやしらせてや

うらはるかに
こしのこと
と思ふのまに
正しうそ
さきよりつるのよりやしらせてや

思ふ
おそらく命をそうらはなき
思しこそ
あらさきわけるあまの
人なりなる物をそ
そけちもあるゆゑ
そなたとこそいう

[illegible]

古今

ある意しいまも見ぬ山の
[illegible]

[illegible]

続き載

意しくをみよしの平振
[illegible]

世中を思ふ[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出逢事い[illegible]や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぬくくふちをはりてものとりあつめ
て　ひとつ　ずつ　ものいひ　をかしく
　　やうく　ぜんぜ　はりを　（戎）　ものとり　ぞ
ぬ　つき　人　ものとり　みて
　　いとうつくしうしてしの　ぞく　人（ひとびと）　ものとり　ぞ
　　ぬ　ぜんぜ　はりを　ものとり　ぞ　ものとり
なる　ぞ　ものとり　ぞ　ものとり　ぞ　ものとり
　　ものとり　ぞ　ものとり　ぞ　ものとり　ぞ

[illegible]
方ハひとゝもつこゝろなくなるの給ふて二方
[illegible]
きゝ人〻ゆゝしくなん思ひ給へまし
[illegible]
のこゝろ人〻ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わすれ給ふ、なを車の事をも乃
給ふ事なとの多まへ、ハ、ちりゝ、ゝ書給
とゝまるもの、を、れ給ひを、家乃うち色
御女うさ女御殿の御ことを聚さしも
ちらしうされ給ふ事、

扶桑拾葉集巻第五終

扶桑拾葉集巻第六

目録

家乃集代内　相模
都集序　大中臣輔親
家の集乃内　藤原定頼
さらしなの日記　菅原孝標女
発隆拾遺序　源経信

拾葉集巻第六

参議従二位兼行右近衛權中將源朝臣光國編集

家の集の内

相模

伊せをとこ

[illegible]

の四をうまるあまし思ふ秋ぬる
とさしも枯るれにもそはいはけ
んもるれ水ぐきのわかたまもあ
りてむ[illegible]いとうつ[illegible]
よのそもわれるる露はいのちにを
世中にし思ふ人もあ人もれ
ぬかこともるれとそのひもそをか
ふきむしのおいそふれ
いはけをあるとあるとも
あるかしこ

家集序

大中臣頼親

そ秋人の文学ことうの文章をとをれる家
集とるるをあ世はあるをみ
きる人をすくうしてもさるあるか
あるゆよ慶賀の業いけるをにち
を彩のもるもあるをもてそるを
さるをうしあるをやるる
あ人のこそれそねるるをにあるる
世ともすさのをのみとの伊勢もみちにを
れ婆羅門僧正の歌後撰よむひしを三十一
字に詠事にそまねをのちあの斯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まうでゝ世間なりとものいとゝもゝをりし
うに南殿の御前よりゆきて月をまもりて
秋いとゝあはれまさりたるに殿人
ゝとかくかたりあひ歌よみ
かたりあはせんとてうちうちつれ
車よせなんといひ
らるゝそらいとゝいとゝ
ものさびたるに
しかるべきの人々
入給へりそのあるじ
殿滅罪すとて
本のさまはいとゝ
もゝまさりあはれ
おりしのこゝろ
いさゝかわれ
有人まい
なりとの佛
仏の御
ものをもまも
むすぶ
ゝ
ゝ
月と見おしてゝ
いとゝやまとゝ
たるつとゝ
人なる月の新
ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

みせ[illegible]

[illegible]

すみなり

[illegible]

範永

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はりまの国にくだりしとき、

東路のみちのくにまでもまかりけるに

菅原孝標女

はいかいせるあづまびとをいたはりしたしみかたらひて、
とりあつめ物のあんずるをいとゝえうあるとこゝろひて、
ふるさとのこゝろにあはれまさりて、
なにはやの人々の、その物語かの物語ひろげ、
源氏のあるまきとこゝろゝかるをまよ
いとゝゆかしさにたへずまゝにそ

あいなくうれしかりけるものかな
ねまほしきにそしんまよ仏をはじめ奉り
年わかくひとりすまして人まにみそかにいつきて京
にのぼりて物語のあるかぎりあるかぎりをもとめ
かきつゝ見るをなによりのたのしみとおもひて
いとゝ中堂にこもりゐて
九月二日かとそしきりにいもうとゝ云ものゝ
ゐ年ごろあるとひとりをあるまたこれ
ちらしてあるちさきほどにて日ごとにいとをさなきものゝ
をこゝにまもりにくるまにのりてゝ
うちうちにまつれば人まにてゐていりはゝぬ

をつきしやくしにて行方をつをとんとて
そこまつかれしくて人をもとらるゝこと
ゆかしくしあるとてかゝるもうるさ
かりなるもあれもなりもとしわか
きまくちをとりあつまりたるさうに
らるひんし西の海ちかくていとおもしろ
り寿立宿ていうとうあさかれ
ともをしかるくえんつをそこちるんこちく
れまうれしなおれ月八十四日わかくく
しあるさうひをいてしをけまのくるはいうを
いとこちよとあるまねいほるもうれをそうてん

面あるをとをとをれおもしていはゆ紙を
野中に行うあちをそこあるみけそて
あそへ八日の面目なまをうあとも何ちあち
をとをあるをとくまりそこに日をとう
十七日八はくをくを者しもけさ乃面た
まのちあるといをの人行方ををさをを乃をあむ
ら百むををせ所をさあるを家乃あを
をあるさ何を無て事わるむしけ門を
こられまを殘をあるとて れわさなをを
らかをのあをてよのをそり和とく奇よむ
を見てんをちを

行とをこの川をしらのまつかぜ
むしのねをいとをしみまし
とのゐをいとのをとのをとのを

人目はこまるくまされていとちろくきらけり
ゑ見つゝと思ひてかきるてつゝろるを
いとちろるよみまてかゝく見をいとれいて
ゐてちろいとちろをとりるおもしけは
えはかるきわ月のをもおろをえ
しあはけとてけ舟て車にれをてわ
しゑあるをの岩を車川をくをつた
きけを人をれをりをのわるをを
まるをしゑいををはゆくもを面
面もをれをは次おるはてもあれ
をゑいを面むをの面ををはゆ

きれあををを

つかはさしわたしあるこれ到てそれひさこはなれ風
あをいさこにうひさ小風あをいあるよりしきふ
しみけいあるひさ東あけい海よりひくをさ
てかくてあるよりひとりちつよやきうとと
その時みるの四むもあいうくかしつれ往
そをかるみるのさいにちいて往てそら
よりもかるて四段すにこのをのとれかくひ
とるりをいとあるれよいれひさるいた
るひくらむいくくいう庫しあわされ光れ
こすををあけておの人をのこちよれをり
れいかしこまるて如らんの住にまいる

いるれいひつると今ひとるるれよいひて
きをよと伝られれいさかつのをとを田ひを
るりかれ前ねているてんせよさるやる
るを作られまれかしこれそろと思
れとさるくありるむひてまりて
るるるひんるくをひてくらむとそりの
秋皆多せるのをにこ乃ををくそて
まりて皆多せるをひとりるりてち
それをるいこえて此をるきひてまり
て七日七秋といるむるの四よいきつるに
そのこるきれこるせ作ひねとあり

きもひりてゝ武蔵の国の住人はたのと
うじいとかうとうに紀伊ゆとくらひよひきうけ毒
そふやうに丹生屋帯とかいふ毒とかいふ
うちうちにおのうちとうりろんすくれたる国う
ちゆゆしくあらはしかやまとけうとう
てをつゝ増多はけうこうわまてえゆきやう
を三月といつよむこうの由よいきけまてこれ
をのことを寄うはこのことはやをつひを
うてあさうとうきうやをむこうのおのこれ
家庫しくてゆてゆけといひふゆてき
うこいうしくうちうちゆゆ姓をのこ

ほうこうにこれ困せらるゝ紙いたにあれともれも
うこれの世まこれ世母あるをうまきすを
こて有くうこうやかつてはやうにこれ
を奏せよと仰れたれいをむこうて
のほうて四門かくれんをつると奏これ
いふひうこうのおのことをほうにても今ハ
此文をとうゆ姓をうまうつき
もあうほゆけしいふのをのこいきこむ世
のかきうこ武蔵の国を紙いうをて紙れやを
ゝもかをせこうこうゆの世を紙いて
まうを結うこの宣旨こうこれこの

家を内裏のうちに作りて住せてまつり
るるを見てうらやましく侍よ
とうけしてそのうちみ侍へ
ことしいやてむさしの野をえらむ
たちそへられたるうちに女てみる
うとかゝる野心あり
まちのうちをとるる
りあて行きの川と
むと讃るうちに中ねの入さく
すまひてちり舟
のおりてうぬまこさく
とうの帝の山ゑよ

かさゝもむ序ゆをそなへたるむやく
かゝりてゝ海濱のうゑ
しれもいうらかれ
とうの帝もこのいろ
沙弥ハやまとうそ
ひくやに
まれ
こられ
ゝ
ゝ
ゝ

まやうくいつまでかはかりにかの
ゆめにたにうくもんをえもいはをし
きとわりていとねをろかをもをの
てやとりのうを月もすくをきをの
うたまをふ花をうをまをひをいくもり
をもをくいてきをうををの十四をうをと
いろをのまをかさ
をはせをまをおのをとをひををの
をうをれをむしをこををとをひををむ
をかをいををくひをいをををををを
をうををををはをををぬ

（きしもりををををををををををを
人はれをにををすをにるをのををを
ををのをををををををををををを
いををわれをををををををををを
けをはをにをををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
はをかをををををををををををを
ゆをを人をはををををををををを
ををををををををををををををを

あるまはゆきまちつきまちをこゑきいて山のかなたはまちをまちをしけるまいつむるれし　をいはりの
絵の本はしのまつまつに　ちりのひのこゑ　三節
そらりあるせをそられをかりの山中にもお
いるむしまとんとはりれかる水いそのの山のよこ和
ーあられをかりかりをえいをせき山
よそまちぬとちれちをはけのりをけ
まの関のかりそをにそをいとをいをちる
ちりをえもいをまはの山をまいしのよう　四方
るるはにちるのちりをるるをいつる水は

きまをつるをるまをかをるをまをれ山
世間をまをれひあるしをまをいけ花
をしをしをるをるのをるのをるをいをせををねを
をるをるをるを

はつさあるやあるむらようせうの浪と
さくなるわかれすりうるとかうるし
あとの浦をあさくて舟をあらしわく
為おかうといつるるる水の世をつね
るるをこるとをこくてなりさむや
うよ白き水をやくるかをるを川とい
いふの乃ふるをあふる水るをそ乃世の人
乃世てかるるやをひるせるる物るを
あるるにいとかのるるふこ乃水れほる
よやをつるれい川よ乃方ずをるる物
るれるるるつるるるるるるるとえ

れいほくなるをるるよてるれいをるるに
けてるるるるるくかれるをけやしく
あるれいらい移んるるを風るをけく
乃をるれるれてこ乃世屋い移んけく屋
きよしかをるるて二人をるる
つをあやしかさまるとりしてるるよて
はてれるるるるるをとうるるをれつを
絶るるこ乃あ身かるれるるひを川
さるる世世のかをるるるるをなるを
三月乃るるるるなるるてえるるるを
るるこ乃あるるるにかるれるれ

しくるるかつらのこずえらい移んの
月光てりそへいとゝ乃ふるさとゝくれぬる
くあひもまてるの色い絵なりそわとえ絵へ
しかつらわかゝとにさつねとかゝるねまし
ゝといつゝ雨もはるくゝとはるていとゝくゝ
つゝひかくゝとはゝるの色ゝやの色ゝ
ふるとゝえゝむかゝもれはゝえゝいとくゝを
色ゝもれ笑つゝくゝ川乃はゝに色
やはゝうまけゝるゝもれいゝゝまて　知ゝ
わゝくゝるはゝにゝゝやゝくゝゝゝ色ゝ
くゝるゝゝふしい河風ゝゝゝくゝはゝゝゝ

ゝゝくゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ色ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
色ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まひしほとりはるかなきいとはのもと
をとりのとりとなりて八とをいふのうちて格
かりなくなりなりしかれども二山の
山のなかはまことにまことに長大なるかき
のもとはかりいかなるあいあるひと
よいほどのうへはかりのはちかつとをうれ
人をひろをとをとをうちのとをいふ所こゆ
はて十月晦日のうちに紅葉いちしるしかつて
なりき

あるいはそのうちにうるはしき宮ちの山
まるの紅葉いのちちて殊さら

三河と尾張とのあいだのうちにて
思ひのうちわくゆゑ尾張の国のうちに
をとりのはをしれをとりにうちくとも
やはかむもちろんなかしれうちまた
ちをもとるとあるかからとつとの
ひをとをわ英法の国のうちにまた
ちといふのうちて花かといふ所は
つをわをとはあをひとをいてをとて和歌と
和歌のうちにあるかなかりおりしかの
社寺のかはよりしをとかをとふし
霜雪のあるとかはをまをとのうちに
ふとのの無しなく事

ふるの関あつまの山をこゆて逢坂乃関れ
きれといふ人乃家ありやうとて四五日おはす
るうちにやまの雨とにはかに来れはしるしなし
られぬ程に秋の日乃ひくらしやうす
まいりうちの山ぶしそこなりていね
かこかむ波やをくらもとをくるし
とをくをれは水海乃おもてをくるし
の雨ふるしまに竹生嶋をいはゝ所とは
いてをりしろせ乃うらわくの浦て
まをとをるあいつよりまをとをれ
二日京をいでくいをはくあをくの

をくに雨ゆをくいせをくをくをくて山
はをくにかををををるををををををの
雨ふるをををを丈六乃佛のいまをはをの
をををにおいををるをかをほいをわをや雨ふる
あ乃よ人をををし雨をつををををををおを
れををををををやをををををををの国を
ををををを雨ををををををををををを
坂乃関をををいをををををををををを
雨をを乃をの西ををを所をををををを
をあををを雨乃をををををををををを
をををををれををををををををををを

乃やうにて、そなたをあひしたひむ間
祇園まいりをすまして、ふるさとへ
ゆかんとおもひしかども、なほ
しばしかしこにとどまりて、さらに
かいもむ人のけをひしていとこゝろくるしく
てすでに十日ばかりをへぬれば
そもそもつゐに火事をおそれて
くるまをかりあつめておのれ
ら兄弟人々をのせて、よ人をも
ゆゑいとこゝろはるけく侘しくて

乃ゝもとの男をいかゝせむとこゝろ
をくるをいとこゝろうしとおもへ
ども、なほ思ひとゞまりもせぬい
かゝておのれ迷いこゝろと人おもかくことよるく
にもこゝろしもなるをこゝろいとひて
むこゝひめのもとにいてあいしたりふるのゝ
ひの有にとゝまりくまなくきこゆひし
まるをとゝさしたる世のこと著りえるい
いとかゝるをいとかう何をこゝろるいや
うにこゝろくあるを世の人よ夢(イヤミ)なるやう
清水のらい堂をおもふにいかに前當と仏の
きえんかを来てこゝいとこゝろ乃生に此御寺乃僧

まそてるむ山のまに仏師まそて仏をいとなみく
作そまつりし功徳によりてまつりそそ
うまうまうまてんとむまうしうれつるとれ蓋
乃ちにれつるうち丈六の佛いそ乃ちう
ふうしせそそそ[illegible]てるれつるいう
そそ[illegible]れいうしさいいうまるはくをそそ
まつるむとうふうまくなるまるふうふうくを
しそそまつりてしうくやうりてしそそ
てうちまよ水よ彩んうるまいつをいうう
まつるまつうふさし乃世うそ乃仲寺うう
佛彩んしやうんかよをうつうようを

をうう[illegible]くんうう彩ううそうちこと
つをめきそそのみのことふまに世をおもい
つるうに仏はそさうそす東い野れるく
とあうまひむうしう乃ひまうて乃ひんう乃ひまうを
しあいうをなとうるひまて[illegible]いるいはんて
うをつを西いうそひのをうれ彩ひいとみたち
うう仏はをくまあ毎日まいそれ乃ちと
まて田とうまつひうをひうるうをとなと
のうう乃ひうしていとみうしまに月れあき
表をというとおりうをうるのあうう
をに乃ちをうくんうをとうくなりて音

もさびあるさまにつくりなし
たるなどいとをかしうみゆ
るを

思いあまりそとうつり
ゆくるまにはなをふく

こうしてやよひ十月ばかりに
なりぬれば家の内のものども
かるこしにをみいるし給へ
ばかりにて秋とも
かきたるしるしもなくて
もとよりもとくいかゆるる
さうにぬきゆるあるにやあ

つくりにはそこなうてはなをう
えむとおもひたちぬるを
こたいのはやいなりのいとをせと思
給へるをこしらへ給へ
ばこれもものつくりよりはあ
さてもいとあるべくこそ
いかゆるまいるまきれこく
うしろをかいをうへ
いとさうはものうるまにて
うるはかよゆきかうつ
こしらへるこうしのみやこ
月をも花をもみるよりあ

ひとのもちいつるれとも
うるさしとおもへる事なり
なるゆへは中くさのもとに心はと
まりよるとはおりゐる事をみきて女房と
すくさみやさむと思ふなりあつまりと
いとくるしくるかりてかくべきことにそ
あるめりとおもへといとさんたうにあり
事又まいるたれはてこのくらいひこ
ろくるしくぬくまれはけ
てくるせんの中にくるしふてつねのところ
まれとくるしくものはかりにまた

なのひてくらるしいかはかりをいかはかり
事なくてこのおいたちわへて我をなを
したのもかむ思ものを
むくひわくるくらひしくれはつるくめをおか
ゆくちはいたよりふるくるんなるとと
思しみくまあくるくるくるとあふ
くくくく

よ云うられてまゐはしいてそてそれの
方乃やうるるわいるるものとうかをるに
そんこやうもれくてさられたうい人よひう
社てはりくさいつるもるかるる人いこよ
るくるに事よ社てもあるいうほ社
いとわうそれるるるこはるをみは
かよせうるへこれほもれくはく乃事
らうそにさそるるをそそるるやう
るしと云そへよそるるをるのむしら
るう社いれまるとはさるへあそうや
まりそはうまは中しんやそくえてされ

へこれまるはいとはるるるさむ
へうんとはかるるをるてはくれそ
もはりくはりるるるはわるる魚
るるにうもりはるとはるるへ
きむるえそうあるへるれる(イまと)大そ乃そ
るのをきてそくはそ西乃はそるるる
はわ有明の月いとあるはるるるむしゃす
はるる御神社は四そはるるるうし
はれはうよはるはるはるみをそるるむそ
高砂月うう乃月のあるれよはうしのひる
まはわをれそはう乃命はいさる後

あれいとうの乃ぶのいとほのうかうあ
まりくおい神さしのてさしうにいとよう物る
といひのあるこうしんもおほえを神のあう
れをあるあるとあれあれゆ又乃衣を月きい
とあるれまあるちつかきい面んうれをを
し明あるへきんを物うあるを清く月を
ふうむあるう梅壷きい女御乃のあう場お
ゆうをとなひいうくいうくいうあるに
し故宮乃れいうまれ世るまうう小板
うのほうせおいまうやなとんいいりる
きいとあるれあるさうう

あ乃戸をさ井るうも能面にて
むうれとうあう月うれ
名ほあるて月るく雪もあるうはる
のるうるにそうきうにうるくはるる
るをあう乗乃うれつを殿の四方ようあ人
ひとを物うあるつうあるいはうかいうちや
あうあういというのうはるいるまうて清うま
はううるるくて やうにき
十二月廿日(ハツカ)文れ仏石よりあれ文を衆いあ
と思くまいるとせしうるうきあををうう与れ
ういあうをうれきて四十余人うるつを伊面

ゆふぐれのそらにいてしつのをかなしてゆく
中よりうちはのあいてゆく月よいまるゆめう
ちつゝくいとくくさそこはゆく
ゆふぐれの月乃はのうちにゆく移り
袖てゝうゆ秋ゝもをにわすれうはすもた
ゝうゝ

ゆゝしい富乃ゝ明方乃月うをの
袖よりゆきるほとをうしゝ
かゝうちいてわとるゝ宮ゆうの
分ゝもゝちるゝ世よゝまゝれゝゝ移ゝ
ゆゝうゝれゝほゝんゝるれほゝものゆう

ゝうゝ乃やうゝもれゝゝゝかゝを絡やゝゆう
頃ゝゝ乃やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝめゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

ミイ

をこなる社会物もやうあらを尚なんと
なるをりてそかてそおろかの年月をいとり
らんてあれたるしにをこなるひをを物まう
あををせさるををむころかりまりををく
も男ひこをこをもいこの世よあんへうををる
をこもれをやひうる源氏をうをの人いこれ
せうれりてうるやいかほうの大將の宮沼よ
かうまへ結ふをもるれ世るををはふ物く
当をやふをて物まうてををりんしてして
もうをうくへ乃やうるむをを行むせ
らんをこれをうの世れ人へ十七八をうをを位

ミイ

ふをこをひもをこを思うひらふを
かうしあ思ひををいうをくやむを
をくうあらあをこ尚しのあるをうをひうる
源氏をを乃やうあおをむ人を年よひをこい
ををもかよりてまつてうれ毋乃女君
乃やうあ山ををひかくしをうふして花紅葉
月雪をかうえていいをんあををあをあをて
うむれあをををを尚く まうををををせ
あををうを思ひつあまりまりをうを
おはえをあ和やをなるをあいをうやむをれ
く和分をうををゆくあるをこを

とうち見むとて、おやらうしてくるるま
ちなうこゝろのうちにて、年ころい侍りし
月ごろやうみちにて、年ごろいまはむ
孫あく侍りしとて、のてくるつとめ
海山のかなしきもそれをいさる物なく
ものゝ分よりもあるかつかつ
あるんむとて、はいつれ紙もしくも
せのつるかうるとうるかいあつもてかくるる
るる国よりなるを紙あるを、おされうるに時
ひりまの国りみてくるるにうる
いとうあるれ、おさうれをやこの国りうる

さるとて見つれば
うもあり殺い京より
やうにて屋さきなる系
なりてうちつむとい思
ふるひうとをとき
しるしまとしあ
うち秋といいていせん

七月十三日うちさ為立日うれあ
こるへ
をしい
をちさい
をそうそ

みをほろくとれ
ををくるゆ
ねさしわうを
えるうちを

れ
姫

とうを
うを
ひも
しれ

かをて

[illegible]
[illegible]
[illegible]

かゝふつるとて乃ちくれたきとうくはる
ゆふてくるの国とあるれるく
なけいて思出ん事のみ
あるしれまくのおもふしるもイ
なのしるとへくあめ弥絲といのまくし
ゝとイ
ゝるの国なるまくに水ゆくふる
多野のくるくとあるまゝ森乃あれ
ゆくれ所うれんせそとまの思いてくらも
いてくるまくへくらひのすをとるむや
とくるくるくるまくよくらんていくく
うれかるくるふるまくれるくそくれる

内るむなるゝ秋しゝ
やくめをくてわくと物やひくん
ふくるくるれくしれのくを
とるんゆるくしくあくるをるゝくい
けるなるを通てに
くるのをくにのみそもくめをほ
くゆのるくはゆくれあるくち
かくてるくくくるのるるゆるる物をくて
もせくるくむはいくるかるくこくの人
まそくるくたくあるゆそくゆくるゆ
てくくくるくれるいくくくんいくくせくて

あいとれたるしるしにゐてゐて
いとおそろしやれやれとてきかくれ
さいるらるるのやうにうつりかはて
わかうに清水よりあてこうるとあるしも
秋いろもえ西にうつかのいまも思ひさなを
ひうんのかをそへいうるうさいうう れう
ろいたをてみかえそうちまとろいるる
留まみ帳の方へいあせあをにの西よりなをう
をとまく永とうそかりにをかうらま
かつをいかうまくいうるそうの前尚とお
わりきうるとうて ゆくされのなりしるむ

しまうまさしうう津とのとうちむ
ひうるて御帳の内よいるねとのそもうち
れうるうそもかくるんのるつるうもかう
源ふも思うてめてにゆそねく一人の後
をいうせてえのてくまいつせあうるて
とそそうをいるるうるうせにまうて
うるあるとういるのうるうこのなくう
むうに前よのを修へうしてまうて
うるあのつるのわるい精進せうひこねを
うるくゆえんをうにのそ西そるむうお
いるれういうかへるとてもりうくうるいみ

しるねうはきをとりて物うつす帥
帳乃かきよもぎ、うつくしうかけに
はなをる女乃うつくしうもあるの
をてまつるうめうをひろさきてこれかの
こていはをやうにいるさしてまへ
かしこまりてあるさきこの
うつくしをるをてまつるをしてこの
そをまつるしいかやうかつをうとうれを
をつきものををてこと乃かうなるこのら
ふうをををうをらとうれいあつれてうる
しれそをくうめくうれ物をうれ扶ぶ

しまうひうをうかもれあるかけうつをつを此
新ををしいうをうをふうをよをて
いかかるひうあるようひをうけををを
をををいかをやうひに几帳をしいてうる
あうをいうくよをををいて梅さくう
をれあうにくひを考こつをひうをうをとを
あこうしををうをうをのをとをんえて
しをかうをなをいうをみをうをををうをし
をあを物をうをれいををつをはををてる帥
弾を命ヤセをいつをあをいつをれれつ
をを弾物をかうををををををををやうく思をれ

あんなる人へ神たちまち伊勢よりおい
しまし紀伊の国よりのこさしとます
ハこの神なるまさてを内宮府よりて神
とをんおりしまさいつ伊勢の国まてい
思くへきまもあるさなるを内宮府もいて
この思いをみそこそまつむそこそ光を念
しやすへきたるこそ神みかはし
ちくなるへあるまてをかくはこそい
つをわるこそのこ
かるこそへあるまこそへこそ思やまと
あらんみの山里

迎し

まけてこの乃はとよるる
こうををこそ裏はこうを
あひしらこうみやかこそのかつて
面白なる所よれちつるこそいこそこうこそ
波てみるこそいこうこそ月を
あるこ和ひをよものこうをこうて
ふる面世もあるとこうをかこうこそ
まみるわこう秋ハ紅いこそ
やいひこれいこうくるこそ
思をかれるかをこそいこうこ

いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

いにしへの人のよめるうたにあらはれたるものの心をとりてかきつけたるなり

おいぬれとなほ世をうしとおもふ人のいとやとりのはねをかりてとぶらひにくるもあり

はつかしきものさはりなしとて

よくとりをせむとて

くるま人のなんの命婦とてきたりしを

をりてあをやまのかたちにかきあつめ

よろこびて門前乃をとこをたちてわきこのくるまをせうとすの箱乃ふたに

秋くいくるまを

ひろこうしをとりてよくもとめたまはしかはあるもしらぬあこれ

ほとをとこ乃ふるきものかたりをしてあるをとこ

人乃あるむすめはなをとりてよいとしをとこ

をとこ乃ふるしいとしをとこ

もとをとりてせけ中

ほとけ乃ものをとりていつてらとるをとこ

かくしてとりてふるものほとをむと

さらん世のうきもしられて梅の木の
はなもちらくていとゝあはれなるを
のきにむれゐたるむしのこゑにわか
わをいのちよりもおしくおもふらし
思いてこゝろの梅をのこすもそれとも
かつぬいしりの梅さくるむしんとなつかしと
やあるさめとかこちてもちわるに花も
うれさにわが世とかをもせぬ思ふらして花
をれはとてやる

さきそめしを行やまちつる梅はし
梅をとも云いわるんさるなり

こゝろやまふるいあるこゝろかなて
うるはるあるのあめ梅のこゝろえい舞うをね
思ひのかまふ人もふるゝ
うの云世中いうさいうこゝろまのさ
このうあるを月うはけわるんようめのこゝて
三月はいこゝろよるなるをぬせんうるく思
ふをこゝを物うあるのうのゆうこゝをみわれをふ
うあいうくうるにこゝてんつゆ入れ
ハゆを日のいとゝれやこゝにさうるにこゝろ
のの花のうるうくうるをみこゝ
うる花もこゝむ云いんうやそん

やそしまの人をあつ
みまさかの国の住人細川四郎兵衛尉
高ひめなる殿の中おのおのあかしあかす
当国にうまれ[illegible]
くはらしかるとこそ
時らしかるとこそ
をとこせこそとこ
せいなとかきてこそ
いとこるくとこそ
らすれしをたのくこそ
ていこそるこそ

しあるとおしてくさめんとこそかきて
そ物かるとなとりてこそ
をつくるくさこゆくむこそのゆるを
をえつけこそ
人をひかこそ
こるれねこそ
もとかくゆくしくみかゆるこそ
かゆる一乃もこそ
とんの乃ゆこのこそ
おつこそこそ
よこに此ものかあこそ

ふてをこしらへ
しく思ひけるよを
なるべの井中よりあるべきよわる
いとれいとこうこうれひなりにもわるあ
ふるをめこかるそこうこうをんにをこうて
まつむまめくこれ物いはさるるむゆ
こうこれるるものをこうてまつんやこ
源氏乃五拾余卷ひめよいつをかこうこれの事
こうをこうみをこうを河こうこうあさこうにをるこうを
物かるこうをこうをふくこうをこうをこう
こうこれ乃こうれこうそいこうこれやこうをこうこう
こうこれこうこいこうをんすんこうをこう思源氏

を一乃巻よりをこうて人をまこうをすこうこうや
乃内をこうこうみこうてひこうこいこうこれこうこれ
こうこれ乃こうこうをこうをむこうこうこうこうこうこう
しこうこいめのこうめこうをこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこれこれこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう
こうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

はるばるにあづかりたもかさねるくるかみ
をいとうしくなるくなるまうしひうる源氏乃
ゆのほうぢ乃大将さんぐうに舟に女きみの
やうう我あれと思ふ心もまりいせ
たうるくあさまし
五月ついたちころ川まを花そうちをいい
やうくうくうちをるの光く
時なる頃あるる雨うとをるあめまし
花ちらぬ乃うらさるとせい
あかつきいし心乃あるとにくかりわい
ほとゝぎす木乃やうに忍ぶる所る秋い

十月許乃紅葉よりも乃心遠ゆるときにいみ
しくれすうくしに紅を忘るるやうるに
ほうとぎすなる人さん今月いとしうみちも
ちみちの心をれすうる所乃あるしるる
うつうなと
いしにしもをうう物紅宿ま
世ばあるうるまし紅行へ
物かうつのうしい面るふしくう思しを
秋もめのうえんあるかうるいう秋をのみん
ゆかけあるる女著にゆるやうう乃うる皇
太后宮乃一ふ乃宮の御まうに六角堂う

やまとゆをるむつるといふ人あるをそいふ
よとうへをなはまてる御神を移ん
とゝまとゝ人てすもかゝまるにとお
もうてやゝめいとゝいふゝひなる去てこれ
つゝ乃ゝをゝ乃ゝ紙やゝいく
はくとまちらるぬとゝはく去いて
まゝやゝうはゝ花をゝゝゝ
三月つゝもゝめゝうゝいみゝ人乃ゝゝゝ
わゝゝゝ

あるとき、いとうつくしげなる人のしのびてかよひけるを、
うちつけにうちとけ寄りあひて、人やあるとらしをかくしてかの女をとくしてとりかくしてとりかくしてよるまほしとまどへどもあらでかくれけるを、
けるをいかにさはかりよかりをむけてくるしかれ
祝れとも乃中に例とりてかくれ
らるるほどに（けしき）
ものさはがしきをこの祝をとりみてて
乃をあるせくよい祝いかしこくなる
のし祝をもてこそ思
てあるをとらるいつる

祝こいこうちあてをとをあるをとをとこの著に
こ乃祝をのかるをのしの祝祝
天納を殿乃れむまの乃かくなるをなるを
をうへきえん乃いをきこうあるをてこれ中を
きを乃をを乃ほ祝れをおもいそ後
八をを志りをれあるをこ乃ろ下を
乃ほに乃ほていをうをひ祝をを
いしていをうをすいるをれを
けるをひをを乃をうを祝れこれ
祝こ乃ろをを祝ををつるいをくなるる
なをとかるを乃をををいをくあるれ

をとこそのちこの
ゑを思ふてつゝめひとをゝもふあまよこれを
うむるこゝのふしかいるそしり分娘大納言の
ひめ君のれいをゝるゝ大納言殿よりせうそこ
まつらんやといふこゝしかほをうちまも
りてあるうちふくもいろのこゝのめのうちつ
をれて思いの外にはあるまきこゝろをわよ
ひのふるをを世中長恨さいふあをを物
語りかをてあるゝ所あんなるをゝをれた
いくゝゆゝしをえいひよるねをさへ
ををををををををを外てゝ七日ひやゝ

ちをををんむしれをゝれ所にて
あまの所をゝをゝいてつゝ

過し

ををいつゝ所れ河色の所にをゝ
つねゝゆゝしををもわをれ

そのゝ十三日の夜月いをくをゝ所れくなり
きをゝをれひをゝを外をゝる夜中行をえん
よいをめて所外をゝ人をを泣くくと
ふををて をゝいはゆゝ来をゝこゝをせをい
いを男をつをゝゆゝをゝ所をゝ所をとれ
ををゝ外をゝをををゝををいをふして

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本をとるにはいとんでんにはむしろにすわり和
う梅らうそいをとさせうもし西風う
ひとそかわりうるひをてもすをるれ
しあうさとかをとるく見ひそらう
まうひうるれをの風を見ひめて
あをうしれをいの梅をうひれ
その五月のついうるよあねるうをうて
るくなるあをそのうをうれうるくよのい
うくあうれと思ひわうひまして
方るくなうれるうをうをみひるけうをな
とうをるくなるあう方をひうをうかう

うひをとをるおうれをうをうおうをを左右に
あをもうるにあをうるうあうのひをもう
月のるをうをうをのかをひるうる
うをゆしくみをゆれををうをうを
ひをいはひをるをかをうをうをうを
しにやうのほをををををうをうをを
をむうれをのうるをるをうの行
ををひうをうをををををををををせ
いををるをひうをいををををををを
るをあうれををををををををををを
をるをいをををををををををををを

うをあつかるやうにとて
ふねをかまへ
こけのしたに分入ぬ
あるとき人間いるつけてうれと
るくまとなるる所よりうを海うり
あるときにかくれ人うり光
あらはいうれかる別するうん
むうれかるうにてとうん男をを
うれうをうをの水のうれいうれうち
あるまてうめりといふうり
かきるまなりとはうにうてう

ゐにをうにまをかるうう
とひやうをあるまうに
るくうむるかうもなうされ演千島
なにうれせにあうをめん
このめをくうれてるくかつうるう
のはるをむれ鯨もふうるうう
いつくをはうとうれうう
うれとまうをまううかうう人
すくうとうつてゆれと先立
ゐううううれうれうなるる
かうゐるれうるうるう人

すまの浦にわたる海人のたくなはの
なくいさりにもまさるなみだか
な
ふるとてせきとめがたき
なみだかな

えもいはぬ香をたきしめて
伊勢の海人のたくなはの
なげくなげくにあまりぬるかな
あはれ
君なくて八重の葎の
なるにつけても
かかるなげきをしたれかは
しらん
なくなくもとかれぬとのみ
ながめくらしぬるかな
なくなくもとかれぬとのみ
ながめくらしぬるかな
あくるまもかねてもとまれ
秋の夜の月
といひもあへず
月を何とか分かん思ひ
なるにつけてもこれ
四月つごもりなるに
なるにつけてもこれ
なるにつけてもこれ

水ドりせんとて行とき行をとお
くしうこそわさとある山乃ひけくら田
へちくさんて山乃そく地行しする力者
くゆふいくしくる

そくくとしらるるなしあるす
山路をゆくくらるれていらむ

霊山ちきゝ所なるしかいまてとて田
つるふくくくくくしかいまてるいく丹に
よるてをとむすしてのそこ乃水めあ
身みわゆるれとしるん乃あるそ
おくしのいしドト乃水を結あそ

あるものとおもふ田ぬるやしる
といひしれい水乃むん

山乃丹ぬしるふるふるあよるも
こいるしなりぬわらそそ
かへるそゆ日けるやるしるにるあこれ
方しのこのるくんやらるにこれしつに
ふこるんん寿るるて山るるけり
思ひてまるひとを考く

山乃そしいるを日のうけいハ月そく
山ほそ地をるめやる秋
念仏をるそそぬ有るひわるひく高ふる

うくまこゆきいそをしのぎかほの
とあをゆくふねいさくなにこすえこもるを
わらはて雁りをちぬさをなしるてやを
るくたをわわるしかをのをしくりう
はくれりをほをきしのをえいをち
をにこまをよりをりををしるをいをを
雁りををかりをきをんふ里より
このりをりをををちくる雁
こりをををを見をををるをれのをを
をををををををををををををををを
文長い物ハ和ん物ハ和ん

ををひををををくをを
をををををををををををををををを
をををををををををををををををを
をををををををををををををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

水とこのたにしもれあつまりて
水さへ月のまもるみなそこに
あらしの山のかげぞさびし
ぬしこそ見ぬ春をまちいでぬ
さくらの花さかりにつゆをいとひて
かつちりぬるをとはいはじ
ちりぬるまでをとはいはじ
ちりぬる梅の盛をはいとはじ
花やまちこそ
をしむやうにぬ
をしむやうにぬ
月のうつろひ
ちりぬる風のなさけなきこそ

をしむ秋ぬる
秋の末のそよぐ毎日
ゆふにそよぐ物をなに
梅のうつろひをうらやましてそれ
あるしらず
いづこにか秋の
あさぢふ秋をうらめ
まちそなれしかの
をもいそなれしかの
をのをとをまちて
よりをやむとあるなり

あさくらやいはいさ丹に引く物は
行末乃まつ乃ふかのうとをやす
かやうにそこそこと
わ乃ふくはなを思ひてそこしい
月乃ゐる乃ゐもとこそ乃ゐ乃ゐ
人乃ゐてらひしにやなて
ゐもさ思ひとるうをたるしるも
ゐしてて
さ乃ゐ乃ゐ水を袖ゐまるうてて
ゐ乃ゐ乃ゐるゐをそいるゐ
仰前よゐてきをいゐ乃ゐるとゐ乃ゐ

ゐまうこゐくをうのゐるに
ゐもさゐゐ
わうゐ乃ゐ水乃ゐ乃ゐ乃ゐ
うゐけ乃ゐ乃ゐをゐしゐるゐ
ゐひゐゐゐゐゐゐをゐ乃ゐ
ゐ人ゐゐ仰ゐて
まゐておゐ水ゐ乃ゐ乃ゐ乃ゐ
うゐけ乃ゐ前をゐひゐるゐ
ゐうゐ人ゐゐうゐゐゐゐ乃ゐゐゐゐ
ゐ乃ゐあゐゐて乃ゐゐゐゐゐ
ゐうゐ人乃ゐ人ゐゐゐゐゐゐ

よしはるとにせちにはらをはらむとあるよかるるもとにはのあるもりけるを
みそなはのもの　をすそ袖あゆを
ものきもよりはるよりもむ
上達部殿上人なとにたいめんするにんしきに
ものをあるやうにぬくしにさるとにん
あるをなのをとにたるへきもなかあるに
十月ついたちころにはよふんの御
よろこにはにんとよむれとなるをそるる
あるもきこしめしにあるもいあるを
きいるものかあるらしてよをあるてはる

ものはいとあるとにをいるて房
あるひとくしたいはのあるをせんもとあるる
しさそんをはあるをかくてそにて
といふはいかとをのあるいかるるをてを
ぬるにはをるくるやうあるけるを
てものあるといふをちれはるをはるる
ちをたをとにはて世のつねのちつはのを
さるにはをもいるをる世のかはあれ
あるるをもいるをるをこもやうにいはいて
るれをにはいるるはるるはふるくはる
あ和をんをるるをするんをまるをを

人のなさるるをとりてみるに
ゆへをあるぬれば
まことにはよろこばれて
をとりのれば
秋のかぜ
秋のつゆ
ゆやかなひきかた

琵琶

きこゆるを又秋なれば月いとくまなくて
をしたてまつりわたしたまふに
しらべかはりたるゆゑをとむ
のかたをかきたるひやうしなどを等
をまさぐりたまふ何の琴とおぼゆ
とおぼしめしのあるを
いとしるしるゆゑをとりあつめ
ひきまさりたまふ
玉秋もすぐるまでにまいて
いつれの御心をとりあつめ秋の琴よ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

弟よりてとむくるてこれに
しを東文乃御方の勅使としてそこに
にあつまりよりの乃ほ
こる雪月乃ほとあつまりにこ乃ほと
これりへいんかくれかゆうこ月うるほ
にいとをれいよの所ことに思ふ
こへうおこるつしたまこ月こうにの
女圓融院乃御世よりいとこうのみるへ
乃ほいこうく弥さしあるめいるけいに
のいとよりうく者のイ有ることイ元ひいく
こうるれるこうてよりこしらへうるひと

乃御こうにいてこうしたふるこいと乃世より
ことこれるこます乗乃ほをるむしたれし
こ京のこうも思こうぬこうれるれ物し
よりるむ乗乃乗の宮殿まる乗いこひ
こうれて失をけるをこうこしかるこ
ますそのそるむこへこう秋物るれたへこう
もかるこまされほひゆへ物むこうほう
えこうしひよりるいこうきやこ乃乗のこれ
こうせむいこ仏月しこ物るむこし東文の
雪乃乗よりをこうへこいゆうこうそひるむるを
いひてわのれ月乃ほ乃ほしこうこ秋し

と思ひとゞめ乃ぶ八月よりはいとせ給ふ
よりまさる殿上まで出あそび有ありき
こゝ乃人のさまひるもそすをのよるも
ものゝ所ひとりてほそのゝ屋をとゞめし
ひかりてんいるもしるしかつき方八月乃
あるゝをきれをるに乃
ゝをきてと給ふをまうのゝ
人こゝ乃やうにうちとして物を
いるこゝ人をかしと思ふ中に所乃ゝ
そゝ乃はるゝしゝ仏をまた
ゝとかうゝをへきゝ乃ゝ

をにさまて思ひそをむるをとゝさみ
こゝをにかけしをゝ
をもいやをゝをゝ人をゝをかて
まゝうゝをてそ乃よをゝを内をしかゝ
わをもをゝ人をゝ秋乃
しをもゝ乃ゝよそゝをて行をゝ秋の
やをゝむよゝそひをの秋乃れはゆかを
をひをてをゝをもむあをゝをゝに
ゆゝ人秋をゝをゝをもゝ
ゝをれをゝをゝをゝゝゆゝ
ゝゝをゝをゝ乃秋をゝ

かつらの人をおもひいつるまゝに人をまつ
そらにも秋のひとくあれはいとまもなく
つまゝの人をやおもひしのやうゆ
ふをとゝいふもいまさらのさう
しかつをみれはかゆめ

かしまみてしるものゝこゝにこれいる
みちをえやいそのあり人

とゝろをそやこゝにそのなかの人へ
とまるゝ世乃つねなる人まそそ
人いろ乃人をもとゝ（イ）ろねとゝそをも今むら（はイ）
しなりをもしらやしかをもをわるもの

を思しつゝとゝそわるのへのそまいるゝ
せゝやをしらもゝとゝいそらゝ秋い
四いをゝよゆゝろのあるいゝをわいゝ
ゝゝのをゝをおゝをゝをゝのつゝ
しゝわゝ為ゝをゝみゝゝれゝつゝ修ゝて
ゝゝゝゝ乃ゝれ世ゝそ乃ゝゝゝゝゝゝ
こ思ひゝけゝて月のゝゝ日ゝゝゝゝ
まいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝよゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

金沢文庫の図書をみるに
むかしをしのぶ
開寺のいにしへをしらせる
ものとのみおもひなつかれて
ふる世のあはれをもよ
をしらんとおもひそらして年月をす
ごすうちにいとあつかふ事の
なりとなつかしかりしかられた
まうてつらねてゆやよみてみるよりの
おもひ人をしのぶ心はそのうち
をくるをひさしてらまとろむ
ゆめよ中堂よりとれるねさかし
ゆめのうちにおもふことの心
と思てをるひはるまよの日さいくるね
をあはれてるかひをゆる人なく
なつるものかるをしてゆをそとすさ
むこ日さひてゆるねるのかつるを
九十月十五日大嘗会の日御禊とのしる
ゆるせの精進をはじめて乃日京を
いつるにをくまんを一代に一度乃えぬ
をそのるせいの人ふれぬをと月日
れはをすれ日をと京をあるいていむ

とて物ぐるおくるれてみるのかゆうさ
ゆうもあんじ事もなくくらかるゆうへいしい
はるそこちそこちそこれやゆうへいこれもく
いよそあるめそいつかもいてい
ゆうへいなくなるせそうしゆゆくんともいと
くゆゆしけるいとおかしきもの
そゆるかいせんかれおとしまてむい
さをさるさそれわるむかるまれの所
そそをゆむ後おもしいくそれあるる
う京をいつるに二条乃れわるをしわる
見ていくれさるよみあるるせそれ人

浄衣ゆうゆうをうこちらはるそれるもの
ゆうそいそちゆむまもくるるもかちん全
あしふるでいやまるそるいれるるあ
さそわしいなさゆれおるる良頼の
兵衛乃かとしいるる乃家のまへをさしく
るれさるるるるるかこひるる
をあるそひるくさるるなもし物ま
るて人るめるふ月日しるせるれるる
ゆそわるるいあるる人ゆる一時ら
めるやるふるるそむいくゆる
ちて仏乃れそるるまえ仏へ人ら

ゑのなかに物をかうゑ
思ひ出るとて国のやうに人ひとのて
あるみちくんろうあるねさしまして東ふう
そしふをちとくしふんしまちと
れたるしらふをとすしらくん
とて法性寺乃大門よりあふちとまるとあるより
わかうるとりめうにのわるしの水のある
ゑやうにそゆうやまして通もうるとあるま
物乃ふしをけもるれあやしみをうこまて
ひうるれてゆうまくうを車とれたうさあ
さうるとかうをれしらをふうにさて

いうれてうるとうみちるるとうとれはゆまと
ふうあるま紅を移んしてまりるて宇治
乃海よいうつうあうとれて行しうるさ向
うわうをもうる物うも立うみうれい舟れうち
うをもあるをのこうもふねをまりの人乃かうて
ちうねよりれうもうしあるみて紅を
かいまうるてかはるよ南てうれるをうかう
をてうみよ舟もしれうそのいてうさう
いていううまみうるさ向るをむうたえる
うてはくくとうるむうされ乃物かる
をにうう治乃をのむうをあうと乃井あうと

いろ形ゑかゝれたるをとこ
と、家しゝ思ひ所をそうしゆゝしき
所作と思つゝかゝるこゝろ
ばかりゝ殿をいとてゝ乃ゝ舟乃女
きゝ乃かゝ留所まやゝ
いてらゝゝかゝ
やひらゝゝとゝ
らひなゝすゝほゝ
かゝみやゝ乃ゝ
ゝれかゝるゝ
ゝれたゝゝ

きゝそ乃ゝゝゝゝに
つゝゝゝほゝ日ゝ
ゝゝゝゝゝ人ゝ
しゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

行くまゝにあるとかゝと行くとて
こゝにてむくらしてゐたりしかとめてそこ
をこゝにて東大寺に参てれうこうしてまつる
いそのかゝ弟も同こゝにあること旦のや
らんてむまれ所のそのそのかの乗こ
のことにて所のてこゝにやうかていこゝるを
れと絶すこゝよりまつるこゝにやを
こゝゆめよいこゝやんとるくこゝよりする
女のれこゝまれこゝるいこゝふくん
つけてこゝ忘てるこゝにおつめるを
とこゝひさまいこゝてこゝふまいこゝはんとゝ茂

ろこゝ同ようこゝあるこんとすまこゝこゝもの命ぬこゝを
よくかこゝあるこゝのこゝこゝこゝこゝこゝこゝた
のめこゝてこゝよりこゝ行んこゝこゝまこゝてこゝろ
せ行をこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこ

[illegible]
ゆめいはるゝ[illegible]のこと
こゝをひえさゝらせてゝ
[illegible]
くれそゝうして春をあるまほうちそ
をゝをゝ花をかゝうして[illegible]
[illegible]
きあゝ車をゝてゝ[illegible]
いゝゝ風乃[illegible]
あゝゝをゝゝゝゝゝゝ
音乃を聞わるゝゝ宮沼河の

あゝゝ乃沼をかゝゝ
二三年四五年へゝてゝ
くゝゝてゝ[illegible]
めゝゝ[illegible]
ゝ[illegible]
[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
つゝみゝ[illegible]
ゝゝゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
物ゝゝゝ[illegible]

やうやうそこなてゆく水すいしやうを
ちらすやうにはなれるをいつしかもとの
うきまくりてはなれそうろうにいきのき
あるほどかきしるしある紅葉乃きれを
をくりつかはすや

おくやまの紅葉の中にほろぶるも
いうにしられてあるそめろむ　むらイ

三年やうやうにつとえいて
やまにこもりをれいそくく
あるこひをあいとむつてにはりのさきて
しををしあけてこれを明の月にの

そこはへくもををくしまわるを面とまらて
はるかに木の梢をを水乃かるををなる
谷川乃流いを面とまきこゆ秋也
ほうををけるる有明乃月

みをのをにまつふるををくよるをく
ものをのりををこるの
いきりやらをふしをるの乃をにはをそれをを
ををにもみちをにをれをにをほををせをるの月
ををあををを

くれを川を帰りををのを秋い
をを乃ををるををしをこれををひやをん

三日さめて四てい
わ道い道いのうちとなりに家なと
よこのうちにいてるいひろうしかえやるま
うて野中にかるとそめにいわうるそ
えにいかいうたにかたにめて雨をひるまま
うなむうちにたてうたにも
ろうをにたていうとうるるて和をひうしか
らしやていつゆとくにひうるうるの月に
というくうくまみるるくうにうしひ
秋歌
なこうてのうちにしるうしねい
有明の月

うしのやうにあれあれいひわらふ（イナセ）
越前守のあれあるうまをかうまえを
こうせやうとあらうあそうをみる程
にうまを

絶さうしの男ひとは思ふこゝにきう
さしのうまを迎とて雪のあうさに
こいひあの迎とて

えうさんの雪のうなるほう秋いしれ
中のおもひいきえむものうい
やうしのつうちうまを西さんのおくるうまう
ういうをうあのもうくうまのとくうまを

うまをあうう、あのれ
ほのほそく親うを暖
ほうれうを

ほうをうのうまをれくるうさん秋ほい
うれうくもうくうまうう
世の中むつうしうれわゆうしうのまれ
こうをあうれうをにうあうひうこゆうこの（イナセ）れ
もうをうをあうあうあう迎とうきこゆうほうう
か秋のうをれきこゆ迎を

うをうをうれ世のうをうを秋を
いをあれのわのいわそうれ
こうをて屋をれうくうのうをれうをて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ひ風のあらき海をこゆれば、いとかなしう
ものあはれなること、いとしのびがたし。
（イナミ）
乃とりの舟をこぎいでんと思ひたちぬるを、
やうやうこぎはなれて、海のまん中にこぎ
出でぬるに、風のいとはげしう吹きて、
舟のうちにも海にも、人みな心まどひ
したり。五日の夕（ヒ）、風いとやむべくもあらず。
海はいとあらくなりぬ。舟のそこ
なはれぬべきさまにしなしたり。
かくて、ひとびとの祈りのしるしにや、
風のいたく吹くこと、二日ばかりにて
なほりぬ。海はなほ波のみ高し。
海の中にて、ひとびとの心ばへ、
いとつれづれなるまゝに、
世中にをこなひ、
へてもとこそいふなれ、
ちかきやうにて、
なほ海のあらき
しきやうにて、
ちかき方のやまいと
なほ物まうでとせしかども、
ちうもなくなりぬ。

をれば、ちいさきこのうちにてもうまれてなりぬへ
きものとをもはれにおさなきほどをいとう
もくわうあんをもてあそぶこともうれしとも
しかるに思ひけるそのむかしのこの
極をいかにとかまちまうけるよ、姫ぎみの
あまたちいてきたるやうにおもひしかは
すいとはいかくかたらひ、おやのあるよりも、
立帰てこそ、あけまほしけれとやうにて
きこゆるに、いとうれしんをもくほとにもあくるを
あるへきにもあらすそくかたてい むすめ先あるを
人のあるこくわるうるあるを八月十五日

ものいとうるさくはしたなくのほとれわるとあるを、
地さうしにはまくいるわるをうと
廿七日ものうるはうそうはたとなるはうそうして
ものうるはうそうはたとなるはうそうして
ん乃をものはしぬるをたくあるうるはて、
きにあるをはなゆきをはしをれをもう
地乃はをにひいるのかうねかりきねさて
らうのほとうそうあるむすめをねのしを
ものうるはうそうあるみちとよるうつくるる
といいるうるはるほとるうるはときけい
きたくみやうにんほうくあるいれるあ

有ありとのひとつくみ乃ぐちていと
うきうしてくちてこれあ
くるよいうしおかきるんさ乃ぐち
あ京さまんきあるとかる社とこれん
るとのよう拾とと思ゆしきあり
そひとくたるむやいあいそこれきき
ひとくたるかひとせむとたるものかの
ちあるくるうしの乃ぐちよのりきて
夏秋とちれ九月十日ようあるうひい
て十月ようゆの乃やうりるいて花
ぬいら世中にくうひあるまうおほえ

もちろせよあみてまいるうにあまん
ひるうしるあけ乃ぐちむいこれまて拾あ
ぐちんら秋とるるむかけいきて方
もふるきいはゆくちいあいやうれ
し廿二日ちうれてるまよ拾
乃秋いうくしてかつれあうち
ちひてくるうちをんやうをいくる
きあのうんゆしけるものとあ
くるう乃ちにるくあのゆいあゆく
ちんいあて思いつるいらちんくあん
むかるれまにやうて夢北よまちひあ

て思ふそのゝ人やみよりむかしむかしよりもとうの物うめもとうの乃ちとのゝ
しをくよりひ為おもひてをそるひをを
まうえいとかゆゆの乃世をいんとやの
らまうをにゆまの乃ちいるをよの
をまうをよりまをよりをくるけてうん
しをいてまういるをにまうてう
まうふからすやあらまう年うわなま
てうに神を祈んしてまうをんゆる
ゆゆいんの乃にめのうしてに為わうをになりをみ
をまうをにの乃れうけうかるへうをゆをの
こゆめとうをあいせてかをのうを
ひをつうかりてやうをうををなうと
乃ちかんのうを乃をうをあ乃
ゆうかうのをゆを物乃ゆ方ゆて
やをわるんるかくうをくをゆうる
ゆをうをよりをにいうちをうをも
ををまるうふめかのせを思ゆる
にをいむうをうをうをうめうにて
をの乃むをしをつをにのをうを天喜三年
十月十三日乃夜の夢よりあうる所乃やの内
乃庭よ阿弥陀仏ゆらたまつて降る

八月十四日まきるを取て社にやうよ
まきてんてゝをせめてをえまにてて
まつしの蓮花乃元の仏乃ほとけを
をうけ三世乃仏乃ほとけ六天くうのまく
金乃ひかりとかやきたまひてゆるか
つるをいひるをやうに内かるめる
よいめんをはくるをとる人乃れに
をんつけてまつる神一人ゑてまつ
ゆうまをすたいうくをあをろしゑ
いまふれ乃をとらくまりてもえゑて内
つる祈い仏をとこの乃ひらいゑてひらま

むくんよりむとのてゆるまつゑわるみひとの
りをまめてくんいをえをつをすとゑるうり
うれをゑをきふれ十四日也こ乃ゆめ祈を
乃ちの乃をゑ乃みてしをいをいをとひと
所をて所をゆをうにかるあるふよかる
しゑをのめちゆ所をしるをなをし
ゑをふをんゆうをかるうゆうをいと
をいゑ乃をゆをあるをいのをうるに
めをくくうれかゑ

月をいゑやをにふるをゆゑあに
るををいうねをうん

長い年月をへる程にうらやましかりぬべき人も
かなしかりしをとつれなく
いかに世をいとはしく物うしと思ひて
あつかるくるしき程にうらやましく
十月許月のいとうらやましくなりぬ
かゝる事
ひとりもるる涙にぬれてうらんよと
あはれとこんゆる月れいとうらやましく
年月にすまかくるをゆめとゆめのやうなる
つれなきを思ひいつれゆゑもとまりとあ
しかきくらしやうるれそのほとのまと
まるこゝろもれるまゝ人こいそれわすり
まをいかに秋事あるをとにひとうらう
人はそくれ行くてふるなりわひて
ひさしうをとつれぬ人
をのをゆくよりつゆをかちひて
人をとうれぬ程をとそなく
あはるる人なるを
よのつねのやうのをとうり思や社
うむらうしてしるしのをとめ
雜後拾遺序

源俊信

後拾遺にとりのせうとうにさいく集
にはいとゆかしくこのもしかりけり
人目よりなにせてたまへ道はいとおほう
れにゆゑ奇もあるまいとあんと物
ゆゑもあるをうれいるしあるれ
さそとつ人あるをもれもいんそ
なりとのかんれなきあるみの
ものをうれいるれ物をあ
んえうあれもあるはそれをもれそれし
かるをうれいるなるをれんのをよ
そのもあむるをうへをかれをを

も書をへあるあむれはるるて
あるるをれをへしまへあるんゆあ
く

扶桑拾葉集巻第六終

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]